

〔特別講演〕

## 親鸞聖人の漢文訓読

広島大学  
佐々木 勇

ただいまご紹介いただきました佐々木でございます。

『浄土真宗聖典全書』全八巻の完結、まことにめでとうございます。

この全書は、親鸞聖人の真蹟が存するものも他の書写本を広く蒐集して対校本文を示し、原本の振り仮名まで付した、浄土真宗本願寺派総合研究所が記念出版として世に送る渾身の六巻です。また、参照すべき既刊書籍の頁数も付されており、各冊の付録もそれぞれに有益です。

本日は、その完結記念の講演会にお招きいただき、ありがとうございます。まず、御礼申し上げます。お越しの皆様、ようこそおいで下さいました。

きょうは、「親鸞聖人の漢文訓読」について話すように言われおります。限られた時間です。どうぞおつきあい下さいませ。簡単なスライドをご覧頂きながら、お聞きいただきます。

## ○、浄土真宗聖典の特徴

## 1. 宗祖親鸞聖人自筆本が大量に伝存する

浄土真宗聖典の特徴を二点挙げるとすると、それは何でしょうか。

一点目は、「宗祖親鸞聖人自筆本が大量に伝存する」ということです。

- ① 中国漢文字音直読資料（西本願寺蔵『観無量壽経註・阿弥陀経註』经文部分など）
- ② 中国漢文訓読資料（『顕浄土真実教行証文類』中国漢文訓読部分など）
- ③ 日本漢文訓読資料（『顕浄土真実教行証文類』日本漢文部分など）
- ④ 片仮名交じり漢字文（『西方指南抄』漢字中心部分など）
- ⑤ 漢字・片仮名交じり文（『唯信抄（西本願寺本）』など）
- ⑥ 漢字交じり片仮名文（『唯信鈔文意（専修寺蔵正月十一日本）』など）
- ⑦ 片仮名専用文（『三帖和讃』などの左注）
- ⑧ 漢字・平仮名交じり文（専修寺蔵『唯信鈔（平仮名本）』など）
- ⑨ 漢字交じり平仮名文（書簡へ一・二・四・五・七・十一・十二）

右のとおり、遺文の種類も豊富です。

これと較べて、たとえば法然聖人の現存自筆本は、ごく僅かです。

## 2. 親鸞聖人自ら、読み方を加点している

二点目をお考えいただくため、現在の日本仏教宗派から見て、宗祖と言われている僧の自筆をご覧頂きます。(スライド映写) 空海・最澄・法然・道元・日蓮・親鸞聖人です。いかがですか? もう一度、ご覧下さい。空海・最澄・法然・道元・日蓮・親鸞聖人です。

そうです。お声が聞こえたとおり、親鸞聖人の自筆本には、読みを示した聖人御自筆の書き入れがございます。お手元の資料には、『顕浄土真実教行証文類』(以下、通称に従い、『教行信証』とする)の「本願、欲生、心成就、文經三言<sup>マハク</sup>」(『親鸞聖人真蹟集成』217頁)前後の画像を載せております。親鸞聖人加点の詳しい訓点がございます。

本日は、この聖人ご自身の訓点によって知られる「親鸞聖人の漢文訓読」について、お話しいたします。

「親鸞聖人の漢文訓読」についてご理解いただく前提として、お話ししなければならぬことが二点ございます。

### 一、物語のことばと訓読のことば

その一つ目は、同時代のことばも一通りではなかった、ということ事です。

築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(一九六三年、東京大學出版會)は、平安時代において、物語のことば(和文語)と訓読のことば(漢文訓読語)とが重なりつつも、異なるものであったことを明らかにしました。

それは、主として、『源氏物語』と『大慈恩寺三藏法師伝』平安後期・院政期点との語彙の比較による成果です。具体的には、次頁のごとき、使用語の相違が有ります(『教行信証』の使用語も、対比させると)。

			『源氏物語』 十一世紀初期	『大慈恩寺三藏法師伝』 十一世紀末～十二世紀初期点	『教行信証』 鎌倉初中期点
〔動詞〕	來 <sup>ク</sup> 交ふ・交 <sup>マシ</sup> る	來タリ 交フ・交 <sup>マシ</sup> ル	來タリ 交フ・交 <sup>マシ</sup> ル	來タリテ・來タリ 交 <sup>マシ</sup> リ	來タリテ・來タリ 交 <sup>マシ</sup> リ
〔副詞〕	いと・いみじく・ いたく	甚 <sup>ハナハ</sup> ダ	甚 <sup>ハナハ</sup> ダ	甚 <sup>ハナハ</sup> タシキ	甚 <sup>ハナハ</sup> タシキ
〔接続詞〕	されど・さるを等 「さ」系	然 <sup>シカ</sup> ルニ・然 <sup>シカ</sup> ルヲ・然 <sup>シカ</sup> レドモ等 「シカ」系	然 <sup>シカ</sup> ルニ・然 <sup>シカ</sup> ルヲ・然 <sup>シカ</sup> レドモ等 「シカ」系	然 <sup>シカ</sup> ルニ	然 <sup>シカ</sup> ルニ
〔助動詞〕	やうなり す・さす	如 <sup>ゴト</sup> シ ル・シム(使役)・ラル(受身)	如 <sup>ゴト</sup> シ ル・シム(使役)・ラル(受身)	如 <sup>ゴト</sup> シ ル・シム・ラル	如 <sup>ゴト</sup> シ ル・シム・ラル

『教行信証』は、経論釈文・日本漢文(和化漢文)に親鸞聖人の訓読を示す訓点が付点されていますので、『源氏物語』ではなく、『大慈恩寺三藏法師伝』の訓読のことばに一致します。

『西方指南抄』にも、「來タリ」「ハナハタ」「シカルニ・シカルヲ・シカレトモ」「コトシ」「ル・シム・ラル」など、訓読のことばを用います。一部、挙例します(以下、親鸞聖人自筆本の用例は振り仮名・訓点の多くを省略し、所在は『親鸞聖人真蹟集成』の頁数と行数とで示す)。

愚癡ノトモカラハ・ハナハタ・オホシ・(『西方指南抄』一六五頁4行目)

ハナハタ・モテ・貴トス・(二八五頁)など、「ハナハタ」全七例。

シカルニ・阿彌陀如来・大光明ヲ・ハナチテ・行者ノマヘニ・現シ・タマフトキ（二八六）  
シカルヲ・五逆ノ罪人・ソノツミ・オモキニヨリテ・（二二四）

シカレトモ・モシ・雙卷經ニ・ツイテ・證誠セハ（三〇六）

須彌山ノコトシ・（二二四） 閻浮檀金ノ・イロノコトシトイヘリ・（二三四）等。

しかし、『西方指南抄』には、和文のことも用いられています。これも、数例を挙げます。

龍女リウニョノ・ホカ・イト・アリカタシ・（七三〇）

五十六億・七千万歳・イト・マチトオナリ・（七六四）

往生オモ・タスケ・候ハ、コソハ・イミシクモ・候ハメ・（六一〇）

イミシキ・經論・聖教ノ・智者ト・イエトモ・（七七二）

人ニ・ムカヒテ・イタク・シヰテ・オホセラル、事・候マシ・（九二四）

サレトモ・法華經ニハ・即往安樂世界・阿彌陀佛ト・イヒ・（八一五）

念佛ノ衆生シユシヤウヲ・攝取セウキョシテ・ステタマハスシテ・往生セサセタマフナリ・（七四六）

衆生シユシヤウヲシテ・ワカクニニ・生サスヘキ・（二〇八）

自筆書簡にも、『西方指南抄』と同様に、漢文訓読語「しかれば」以外に、和文語「されこそ」（書簡八）が使用されています。

親鸞聖人は、『教行信証』の訓読には「訓読のこば」を用い、『西方指南抄』や書簡には「物語のこば」をも用いています。

ただし、現存自筆本は、『西方指南抄』・書簡や和讀でも、「訓読のこば」の割合のほうが高くなっています。

## 二、訓読のことばにも変遷有り

二点目は、「訓読のことば」にも変遷が有った、ということ事です。「物語のことば」の変遷には本日は触れませ  
ん。

「訓読のことば」も時と共に変遷したという事実は、主に左の二本にまとめられています。

小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』

(一九六七年、東京大学出版会。以下、『漢研』と略す。)

小林芳規『平安時代の佛書に基づく漢文訓読史の研究』全十冊

(二〇一一年〜刊行中、汲古書院。以下、『佛研』と略す。)

「訓読のことば」の変遷について、次のようなことが知られています。

- (1) 漢字の定訓化(「過」ユク・ワタス・ヨギル…↓スグ。「者」ヒト↓モノ。など)
- (2) 不読字の定訓化(接続詞「以」不読↓モチテ。並列「及」不読↓オヨビ。など)
- (3) 和訓読から字音読へ(「乃至」マデニ・モ・セシモ・モス↓ナイシ。など)
- (4) 副詞に呼応する読み添え語の統一・消失(「況ヤ…ニハ・ヲハ・テハ・ハヤ等」↓「況ヤ…ヲヤ」、「當ニ…ム・ベシ・ムトス等」↓「當ニ…マサベシ」、「唯(タ、シ)」↓「唯(タ、シ)」)。
- (5) 読み添えの助詞・助動詞の消失・統一(添意の助詞へコソ・ゾ・ナガラ・ツツ・サム・ケム・マシ等)の消滅・推量の助動詞の「ム」「ベシ」への統一)

きわめて簡略に要約いたしますと、「訓読のことば」は、時代と共に単純化・簡略化を遂げた、と言えます。

三、同時代の訓読のことばも一つではない

「親鸞聖人の漢文訓読」の前提となる二点、「同時代のことばも一通りではなかった」と「訓読のことば」にも変遷が有った」とをご理解いただいた皆様は、親鸞聖人が生きた時代の訓読のことばも一通りではなかったのではないかとお考えかと思われれます。

その通りです。

同時代の「訓読のことば」も、一通りではありませんでした。

1. 漢籍の訓読と仏書の訓読との相違点

漢籍の訓読と仏書の訓読とは、使用する訓読語や訓読法が異なっていたことがわかっています。

(1) 助字の訓法（『漢研』三四八頁）

「助字」とは「漢文で、語句の終わりについてその語句にいろいろな意味をそえる文字。「矣（イ）」「乎（ヤ）」など。置き字。虚字（キョジ）。助辞。」

①「之」——漢籍は、不読。仏書は平安中期から「コレ」と読む（平安初期までは不読）。

親鸞聖人は、仏書の「コレ」と読んでいます。

虚空雖<sub>モ</sub>復<sub>モ</sub>非<sub>ナリト</sub>内<sub>ナリト</sub>而<sub>モ</sub>諸<sub>モ</sub>衆<sub>モ</sub>生<sub>モ</sub>悉<sub>モ</sub>皆<sub>モ</sub>有<sub>リ</sub>之<sub>コト</sub>（『教行信証』四二四頁5行目）

②「則」——漢籍は、不読（直前の字に「バ」「テ」「トキンバ」を付す）。

仏書は、「スナハチ」と読む。ただし、真言宗では不読。

『教行信証』親鸞聖人自筆本では、「スワテ・則チ」と加点しています。ただし、左の部分のみ、直前の字に「トキンバ」を付す。

若シ不ハニ依ラニ智慧ト方便トニ菩薩ノ法則不コトヲ成就セ何以ノ故ニ若シ无クシテ智慧ニ為ニスルニ衆生ノ一時キンハ則墮セム顛倒ニ若无シテ方便ニ觀スルニ法性ヲ時キンハ則證セム實際ヲ

(『教行信証』三八一4。曇鸞『無量壽經優婆塞願生偈註』引用部分)

③「於」―漢籍は、「オイテ」または不読。仏書は、「オイテ」と「ニシテ」。

親鸞聖人の訓点は、「オイテ」と「ニシテ」です。

於ニ雜之言ニ攝入ス萬行ヲ(五一五二)

序法威菩薩於ニ世自在王佛ノ所ニ悟ニ无生忍ヲ(四四〇三)

④「而已」「耳」―漢籍は、「シク……耳」。仏書は、「耳」「耳」

親鸞聖人の訓点は、「ナラクノミ」です。

知者言ニ之ヲ耳(三二四八)

⑤「欲」―漢籍は、「ホツス」または「オモフ」。仏書は、「オボス」「オボス(尊敬)」と「(ムト)ス」。

親鸞聖人の訓点は、仏書の訓読法と一致する「オモフ」「オボス(尊敬)」と「(ムト)ス」です。

大師聖人我今欲ニ見トニ曼陀羅華ヲ(三〇五一)

欲ニ使スムト四一切衆生ヲシテ莫ラニ不ルコトニ齊歸セ(三四六五)

梅檀ノ根芽漸漸生長シテ纔ニ欲ニ成ト樹ニ(六八二)



(2) 実詞訓の訓法(『漢研』三七二頁)

①「言」と「辞」との訓み分け

漢籍は、「言」「語」「話」―コト、「辞」―コトバ。仏書にはこの訓み分けが見られません。

親鸞聖人は、「言」「語」「話」に「コト」とも「コトハ」とも加点し、訓み分けません。

豈<sup>ニ</sup>可<sup>ヘム</sup>得<sup>四</sup>三言<sup>コトヲ</sup>ニ彼<sup>ハ</sup>箭<sup>ハ</sup>深<sup>ク</sup>毒<sup>ハ</sup>厲<sup>ク</sup>聞<sup>トモ</sup>鼓<sup>ニ</sup>音<sup>ヲ</sup>聲<sup>ヲ</sup>一(三三三二)

莫<sup>ニ</sup>隨<sup>ト</sup>邪<sup>見</sup>六<sup>臣</sup>之<sup>言</sup>ニ一(二七八四) 菩提者<sup>ハ</sup>天<sup>竺</sup>語<sup>ニ</sup>此<sup>ハ</sup>稱<sup>ス</sup>道<sup>ト</sup>一(三三七八)

是<sup>即</sup>定<sup>ル</sup>辞<sup>ナリ</sup>(四九二六)

②「モロモロ」「諸」「師」「衆」の用法

漢籍は、「諸を以ゐて」のように、「モロモロノ人」の意味で、「ヲ・ニ・ト・ハ・ノ」等をつけて、「モロモロ」を広く用いています。

仏書の「モロモロ」は、「ノ」を下接する連体用法のみで、「モロモロノ人」の意は有りません。

親鸞聖人の訓点は、「ノ」を下接する連体用法に限られます。この「諸ノ」は、左のように、「モロモロノ人」の意ではありません。

有<sup>テ</sup>諸<sup>ヲ</sup>菩薩<sup>ニ</sup>一(二四七四) 十方<sup>ヲ</sup>諸<sup>ヲ</sup>菩薩<sup>ニ</sup>一切<sup>悉</sup>來<sup>集</sup>一(六二四七)

③副詞「コトゴトクニ」「コトゴトク」(悉・咸・盡・卒など)

漢籍は「コトゴトクニ」、仏書は「コトゴトク」を用います。

親鸞聖人は、「コトくく」です。

安樂<sup>ノ</sup>聲<sup>聞</sup>菩薩<sup>衆</sup>人<sup>天</sup>智慧<sup>咸</sup>洞<sup>達</sup>一(三四六八)

盡<sup>コト</sup>皆<sup>巡</sup>一(四六二七)

その他、(3) 副詞の呼応語(『漢研』三九八頁)、(4) 読添語(『漢研』四一六頁)などは、すべて省略致します。

『教行信証』の親鸞聖人自筆訓点は、漢籍の訓読法を交えるものの、仏書の訓読法に大部分一致します。

さらに、同時代の「漢籍の訓読」と「仏書の訓読」のそれぞれの内部にも、家や宗派・流派による訓法の相違が存したことが判明しています。

## 2. 漢籍の訓読は家によつて異なる

(1) 源氏物語の漢文訓読法は、菅原家の訓法である。(紫式部の父為時は、菅原文時の高弟であった。)

(2) 「所以」―清原家「ユエ」、中原家「ユエン」。

(3) 藤原家―和訓読が多い。菅原家―字音読が多い。

等、家による訓読法の相違が存しました(詳しくは、『漢研』を参照ください)。

## 3. 仏書の訓読は宗派・流派によつて異なる

(1) 真言宗高野山・法相宗興福寺・真言宗仁和寺・天台宗三井寺では、それぞれ法華経の訓読法に差異が有る。

(『佛研』V 第十一章 第三節 平安後期における宗派間の訓読法の差異)

真言宗高野山―「令シムフ」「者モト」「況ヤハ」「勿ナ」「不ム」等の古訓法が見られる。「及」「若く若く」の並列連詞を不読とする古訓法を採る。また、「當マサニ」「當マサニ」の再読字の比率が低い。

法相宗興福寺―右の古訓法が見られず、並列連詞を「及オヨビ」「若モシハ」「若モシハ」と読む例が不読の例に混じる。「當マサニ」

シ」の再読字の比率も高い。

真言宗仁和寺―並列連詞を「及<sup>オヨビ</sup>」「若<sup>モシハ</sup>」と読む例が多い。しかし、「當<sup>マデニ</sup>ベシ」の再読字の比率はそれほど高くない。

天台宗三井寺―「者<sup>モト</sup>」が多用され「者<sup>モト</sup>」を交え、「及<sup>オヨビ</sup>」は不読が基本であり「及<sup>マデニ</sup>」も見られる。

(2) 平安後期の比叡山では、諸種のヲコト点法が行なわれた。仁都波迦点・寶幢院点・池上阿闍梨点・天仁波流点・天尔波留点(別流)などである。それぞれの訓法には、小異が有る。

(3) 平安後期(一〇〇一〜一〇八六)の間にも訓法の変遷があり、宗派・流派ごとに新訓法に移行し、宗派・流派相互の交流・影響が存した。

これらについても、詳しくは、『佛研』をご覧ください。

#### 四、親鸞聖人の漢文訓読法

##### 1. 日本の漢文訓読史における位置づけ

では、親鸞聖人の訓読のことば・訓読法は、日本における漢文訓読史上に、どのように位置づけられるでしょうか。

親鸞聖人の訓読法は、次の点などから、日本漢文訓読史上の「単純化・簡略化」を先取りしている、と言えます。

①平安時代では漢籍・仏書とも置字であり不読とされた「也」を、「ナリ」・「ヤ」(疑問文)と必ず訓じている。

②「而」を、順接「テ」「シテ」、逆接「シカルニ」として、読み分ける。

③名詞以外の「者」を「ハ」「バ」の固定訓とし、不読としない。

他の具体例は、省略致します。

## 2. 親鸞聖人が使用した声点

濁音表示の中心的方法であった「濁声点」の形式に諸種があり、宗派・流派によって使い分けられていた時代がありました（『漢研』第五章第五節、参照）。

親鸞聖人が生きた鎌倉時代になると、濁声点使用の実態は、左のようになります。

濁声点○形式―清原家・菅原家・真言宗―清濁を比較的好く区別する。

濁声点○形式―藤原家・中原家・天台宗―清濁をあまり区別しない。

（佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』（二〇〇九年、汲古書院）第三部第七章 濁声点の加点率に見られる位相差、参照）

親鸞聖人は、天台宗から起こった「○」「一」の濁声点を用いながらも、声点によつて清濁を厳密に区別していません。

親鸞聖人の漢文訓読法は、日本漢文訓読史上の「単純化・簡略化」を先行していました。

一方、濁音は詳しく区別しています。

この両者は、一見、相反することのように見えます。

しかし、この両者に共通するのは、親鸞聖人の読者への配慮、すなわち、「わかりやすさ・理解しやすさ」の追

求である、と考えられます。

## 五、親鸞聖人のことば

### 1. 親鸞聖人の経文解釈

親鸞聖人の漢文訓読法には、通常とは異なる読みがある、あるいは、自らの解釈を示すための強引な訓読である、という類の指摘が早くからございます。

左に、その中で、比較的新しいものを引用いたします。

諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、願生彼國、即得往生、住不退轉、唯除五逆誹謗正法。

これを親鸞は、次のように読んでいます。

末末注)『教行信証』信巻。別の箇所では「至心に廻向せしめたまへり」とも読んでいるが、阿弥陀仏の側が主体になることは同じである。

あらゆる衆生、其の名号ななうがうを聞きて、信心歡喜せむこと、乃至なほ一念せむ。至心に廻向まがしたまへり。……

ここで、「廻向したまへり」と敬語に読んだところがポイントです。つまり、これは衆生の行為ではありません。阿弥陀仏が廻向して下さった、ということです。(以下、略)。

ところが、もとの文そのものでは、到底このように解釈することはできません。「至心廻向」の主語はあくまで「諸有衆生」としか考えられません。親鸞の解釈はあまりに強引です。このような解釈が可能になったの

は、訓読によって、漢文が漢文としての文脈を解体され、日本語の文脈のなかで自由に解釈されるようになってきたと考えられます。

〔末木文美士『日本仏教史 思想史としてのアプローチ』（新潮社、一九九二年。一九九六年に新潮文庫（す・131）に入る。引用は、新潮文庫本352・353頁に依る）。〕

末木が引用したのは、左の一部分です（『無量壽經』本文は、巻下・巻頭近く。大正新修大藏經では、T0360\_12.0272b11に於たる。へく内は割書）。

大經ニ言ク<sup>ノタマハ</sup> 諸有衆生聞テ<sup>アラユル</sup> 其ノ名号ヲ<sup>アラユル</sup> 信心歡喜セムコト乃至一念セム至心廻向シタマヘリ願スレハ<sup>アラユル</sup> 生ト<sup>アラユル</sup> 生ト<sup>アラユル</sup> 生ト<sup>アラユル</sup> 住セムト<sup>アラユル</sup> 不退轉ニ<sup>アラユル</sup>（『教行信証』二二二一七）

末木注に「別の箇所では「至心に廻向せしめたまへり」とも読んでいる」と有るのは、次の箇所です。

本願成就ノ文經ニ言ク諸<sup>アラユル</sup> 有衆生聞テ<sup>アラユル</sup> 其ノ名号ヲ<sup>アラユル</sup> 信心歡喜セムコト乃至一念セム至心二回向セシメタマヘリ・願セハ<sup>アラユル</sup> 生ト<sup>アラユル</sup> 彼國ニ即得<sup>アラユル</sup> 往生ヲ<sup>アラユル</sup> 住セム<sup>アラユル</sup> 不退轉ニ<sup>アラユル</sup> 唯除クト<sup>アラユル</sup> 五逆ト誹謗正法トオハ<sup>アラユル</sup> へ已上<sup>アラユル</sup>（二六三4）

「シタマヘリ」の例は、別にもう一例ございます。

本願ノ欲生心成就ノ文經ニ言ク<sup>アラユル</sup> 至心廻向シタマヘリ願ハ<sup>アラユル</sup> 生ト<sup>アラユル</sup> 彼ノ國ニ即得<sup>アラユル</sup> 往生ヲ住セムト<sup>アラユル</sup> 不退轉ニ<sup>アラユル</sup> 唯除クト<sup>アラユル</sup> 五逆ト誹謗正法トヲ<sup>アラユル</sup> へ已上<sup>アラユル</sup>（二二七3）

親鸞聖人は、他の聖教でも、「廻向セシメタマヘリ」「廻向シタマヘリ」としています。この訓読法は、徹底しています。

具体例を挙げます。

○ソノ中ニ・コノ念佛往生ノ・願成就ノ文ニ・イハク・諸<sup>アラユル</sup> 有衆生・聞<sup>アラユル</sup> 其名号<sup>アラユル</sup>・信心歡喜<sup>アラユル</sup>・乃至一念<sup>アラユル</sup>・至心<sup>アラユル</sup>

廻向エウカセシメタマヘリ・願ネガフ生マシ彼國ニ・(『西方指南抄』一六八六)

○本願成就ノ文經マハニ言ク 諸有衆生アラレル聞キテ其ノ名號ヲ信心歡喜シテ乃至一念セム至心ニ廻向シタマヘリ(『浄土

三經往生文類(略本)』九2)

○諸有衆生・聞テ其レ名号ヲ信心歡喜セムコト乃至一念セム至心廻向シタマヘリ(『浄土論註』卷上・一〇五4)

○至心廻向シムエカフト・イフハ・至心ハ・眞實ト・イフコトハナリ・眞實ハ・阿彌陀如來ノ・御コヽロナリ・廻向エカフハ・本

願ノ・名号ヲ・モテ・十方ノ衆生ニ・アタヘタマフ・御ノリナリ・願生彼國ト・イフハ・願生ハ・ヨロツノ・

衆生・本願ノ・報土ヘ・ムマレムト・ネカヘトナリ・彼國ハ・カノクニトイフ・安樂國ヲ・オシヘ・タマヘル  
ナリ・(『一念多念文意』一〇3)

○至心廻向欲生ト 十方衆生ヲ方便シ 名号ノ真門ヒラキテソ 不果遂者ト願シケル(『浄土和讃』七六2)

「至心廻向」は、阿彌陀如來が衆生に「アタヘタマフ」もの、とする解釈です。

顯智書写本『浄土和讃』では、「至心廻向欲生」に「アマिताニヨライノオムス、メナリ ムマレムト オモフシ  
ユシャウノ コヽロサシロ ス、メタマフ チカヒ也」の左注が有ります。

## 2. 右の解釈はどこから来たか

この親鸞聖人の「至心廻向」の解釈は、どこから学んだものなのでしょうか。私には、経文解釈の歴史はわかりません。

親鸞聖人の師である法然房源空の解釈を知りたいところです。ところが、最初にお話ししたとおり、師・法然には自筆本・加點本が少なく、法然の「至心廻向」の訓詁法は、不明です。

ただし、法然の語録である『黒谷上人語燈録』(龍谷大学図書館蔵・元亨版)に、「修行しゆまうを衆生しゆじやうに廻向えかうし給ふ

とする、左の箇所が存します。

彌陀如来は因位の時もはらわか名号を念せんものをむかえんとちかひ給ひて兆載永劫の修行を衆生に廻向し給ふ 濁世のわれちか依怙末代の衆生の出離これにあらすはなにを可期せんや（一七オ・ウ）

しかし、「至心廻向」「廻向発願心」については、次のとおりです。

○一すちに極樂に廻向して往生せんとなかふへき也（二78ウ）

○三に廻向發願心といは善導これを釋しての給はく過去および今生の身口意業に修□るところの世出善根および他の身口意業に修するところの世出世の善根を隨喜してこの自他所修の善根をもてことごとく眞實深心の中に廻向してかのくにむまれんとねかふ也かるかゆへに廻向發願心となつくる也又廻向發願してむまるといひかならず決定して眞實心の中に廻向してむまるゝ事をうる思ひをなつくる也（二77オ・ウ）

○善導も廻向してむまるへしといへとももろくの疎雜の行となつくとこそはおほせられたれ（三26ウ）

○熊谷の入道へつかはず御返事

いまよりは一念ものこさすことごとくその往生の御たすけになさんとこそ廻向しまいらせ候はんすれば、かまへてくおほしめすさまに遂させまいらせ候は、やとこそはふかく念しまいらせ候へ（四41オ）

現存する『黒谷上人語燈録』が法然聖人の言葉を正確に伝えているとすれば、法然聖人は、「阿彌陀如来が廻向してくださった」とは解釈していなかった、と考えられます。

「至心に廻向したまへり」の訓読法は、親鸞聖人が考え出したものである可能性が高いのではないのでしょうか。

### 3. 親鸞聖人のことば

われわれは、親鸞聖人の「ことば」を直に知ることができます。



これは、世界の宗教・日本仏教の諸宗派中、希有なことです。

『浄土真宗聖典全書』は、親鸞聖人の「ことば」をそのままに後世に伝えようとする編集方針のもと、聖人自筆本はもとより、その他諸本を博搜し、対校結果を示しています。

また、親鸞聖人の思想を育んだ背景をも知るべく、本日引用いたしました『黒谷上人語燈録』をはじめとする法然関係諸本および系図等を、第六巻の補遺篇に収載しています。

全六巻は、熟慮の上に構成された、充実の内容です。

親鸞聖人750回大遠忌法要を機に、最新の学術成果に裏づけられた聖典が公刊されたことは、真に喜ばしいことです。

以上で、私の拙い話を終わります。

『浄土真宗聖典全書』全六巻の完結・出版、誠におめでとうございます。

#### 〔付記〕

本稿は、令和元（二〇一九）年九月四日（水）に龍谷大学響都ホールにて開催されたシンポジウム「親鸞聖人ことばの織りなす力」での講演をもとにまとめたものです。

当日は、浄土真宗本願寺派総合研究所の丘山願海所長・満井秀城副所長はじめ研究所の皆様にあいへんお世話になりました。また、熱心にお聞き下さったご参会の皆様にも、厚く御礼申し上げます。